

平成26年度教師海外研修(ラオス) 研修報告書

学校名	愛知県田原市立赤羽根中学校	氏名	鈴木 康弘
-----	---------------	----	-------

1. 現地研修に対する各自の目的 とその達成度

(特に、現地研修の経験を生かす授業実践に資することについて)

私には、世界の危機や発展途上国について、知らないことがあまりにも多くあります。また、自分に何かできることがあるだろうかと考えることもあまりありませんでした。「生徒が本気で考えるためには、私自身ももっと知らなければいけない。」これが私の思いでした。

ラオスでの現地研修の中では、「支援のあり方」について特に深く考えました。例えば、ごみ処理の支援についてです。私は、日本式のものをもっと取り入れればよいのにと感じていました。しかし、ラオスという国の文化・考え方・経済状況をよく理解し、それに沿った方法でなければ、継続していかないということを知りました。つまり、相手のことを考え、相手に寄り添った支援が必要ということに気付くことができました。

この他にも、現地に行ったからこそ学べたことが多くあります。その課題に生徒自身が気付けるような社会科の授業をしていきたいと思えます。

2. 訪問国から学んだこと (気づいたこと、わかったこと、大切に思ったことなど)

(1) 柱1「訪問国に肯定的に出会う」という観点から

私はラオスから、人として大切なことを教えてもらったように思う。

例えば、サヤブリー子どもセンターでのこと。私は、「サバイディー(こんにちは)」と子どもたちにあいさつをした。すると、体をこちらに向け、手を合わせ、会釈をしながら返事をしてくれた。あいさつがとても気持ちいい。

例えば、インタビューの場面。多くの人は多少恥ずかしがりながらも、「いいよ」と答えてくれ、最後まで話を聞こうとしてくれた。もちろん、ラオス語が話せないので思いを伝えづらいのだが、こちらが何を言いたいのかを考えながら聞いてくれる。さらに、「大切なものは何ですか?」と聞くと、多くの人が自信をもって「家族」と答えた。

このような「あいさつ」や「思いやり」、「家族への思い」は、人として当たり前のことかもしれない。だが、私はこのラオスでの研修を通して、その大切さと心地よさに改めて気付かされた。

(2) 柱2「日本と訪問国とのつながりや同一性を理解する」という観点から

青年海外協力隊の本間さんはサヤブリーでバレーボールを指導している。本間さんが生徒の輪の中で指示を出す時、生徒たちは速やかに道具の準備に入る。練習をしているときの表情はとても真剣である。だが、休み時間になると、生徒たちも本間さんも、笑顔で楽しく会話をしていた。

技術面、マナー面どれをとっても、海外で指導することはとても大変なことだと思う。例えば、「ごみを捨てない」という文化や習慣が、ラオス人にはあまりない。当然、その考え方はなかなか理解されない。そこで、

本間さんは生徒たちの考え方もきちんと聞き、その上で、彼らが納得できるようにていねいに話を続けてこられたそうだ。どのような支援をするにしても、相手の文化を尊重し、相手の考えていることを理解しようとする気持ちが大切だと思った。

文化や習慣の違いはあっても、思いは通じる。そう実感した。

(3) 柱3「共通の課題について共に考え・共に越える」という観点から

ラオスでは、ごみ処理が大きな問題になっている。そもそも地方自治体という考えや、税の徴収能力があまりない。そのため、なるべくお金をかけずに廃棄物の処理を続けなければならない。また、処理のシステムを続けるためには、ごみを出す住民の理解と協力、実行が必要になる。そこで、ラオスパイロットプログラム環境コンポーネントでは、エコバスケットやミミズコンポスト、ごみ処理場の整備などを行っている。どの取り組みも、住民とよく話し合った上で行われているものであった。

私は、この研修に参加する前は、日本式のものをもっと提供すればよいのではないかと思っていたが、それでは資金が足りない場合も当然あるし、仮に取り入れたとしても、相手国になじまず、継続していかないことがあるということに気付いた。私たちは、常に相手の文化や習慣を理解し、相手の思いに沿った支援をしていかなければならないと思った。

3. JICAの国際協力事業の「良い!と思ったところ」と「今後あるといいなと思う視点」

産業支援や不発弾除去、職業訓練、ごみの処理、教員養成短期大学での活動、病院、環境教育、スポーツ教育、学校図書室、障害者支援など、さまざまな分野での支援の現場を見させていただいた。これらの国際協力事業に携わる方たちの、生き生きと働いている姿がとても印象的だった。それぞれの方たちのやる気や思いが生かされているなど感じた。そして、本人のやる気や意欲も当然高いと思うが、JICAが現地で行う支援も整えられているのだろうと思った。また、事前に研修があると聞いたが、そういったシステムも素晴らしいなと思った。また、こうやって活動する人の姿を、今回の研修の中でたくさん見せていただけたことが私にとってはとてもありがたかった。

ラオスの街を見てみると、電線や建造物、道路が乱雑であると感じた。そこで、今後あるといいなと思うのは、「街づくり」という視点が挙げられる。持続可能という意味で、計画的な街づくりはとても大切だと思う。

4. 訪問先ごとの「感じたこと」や「学んだこと」

④ 短期職業訓練トレーナー育成のための職業訓練プロジェクト／IV-JAPAN

思いをもって、行動に移すことの大切さを学んだ。施設長さんは、「発展途上国における教育支援をしたい」という思いをもち、自らNGOを立ち上げ、タイやラオスに渡り、職業訓練や奨学金支給などの活動を続けてきたのだそうだ。そういう「思い」をもった生徒を育てることが自分たちの使命の1つだと思った。もちろん、これほどの活動をする生徒は100人中1人もいないかもしれない。でも、こういった活動に賛同する生徒、関心をもつ生徒は1人でも増やしたいと思った。そのためには、やはり授業。生徒が本気になって考えるような

教材や話題を提供したいと思った。

また、この支援は5年間のプロジェクトなので、5年のうちにカリキュラムや指導システムをつくり、ラオスの管轄に移していかなければならない。こういうプロジェクトが続けられたからこそ、開発途上国の課題が少しずつ解決し、発展してきているのだと思った。自立を目指して、地道に地道に支援を続けていくことの大切さも学んだ。(鈴木康弘)

⑫ 青年海外協力隊（バレーボール）活動

青年海外協力隊の本間さんが話し始めると、生徒たちは指示をよく聞き、速やかに道具の準備に入った。バレーボールの練習をしているときの表情は真剣そのもので、生徒たちの技術も想像以上に高い。だが、休み時間になると、生徒たちも本間さんも、笑顔で会話を楽しんでいた。本間さんは、何年も前からずっとこの生徒たちの輪の中に見えるように見えた。

技術面、マナー面どれをとっても、海外で指導することはとても大変なことだと思う。「ごみを捨てない」という日本人の多くにとっては当たり前のことでも、ラオスにはそもそもそういう文化や習慣があまりない。そうすると、その考え方はなかなか理解されない。下手をすればそっぽを向かれてしまうかもしれない。そこで、本間さんは生徒たちの考え方もきちんと聞き、その上で、彼らが納得できるようにていねいに話を続けてこられたそう。どのような支援をするにしても、相手の文化を尊重し、相手の考えていることを理解しようとする気持ちが大切だと実感した。

体育館の壁には、「チームとして大切にしたいこと10か条」の掲示物がていねいに貼られていた。(鈴木康弘)

⑬ 少数民族の村

ラオスの街の中心部と比べて、生活水準がずいぶん違った。家はせまく、私たちが取材した家庭は、5畳分の広さのところには5人くらいが生活していた。しかし、子どもも大人も幸せそうな表情が印象に残っている。

「ラオスの国民性」についての取材では、「大切なものは何ですか?」と村人に聞いてみた。すると、こんな答えが返ってきた。「子どもしかない。」家族を大切にするラオスの人たちの心を強く感じた。

ゴミ処理についての取材では、村の中の廃棄物処理の様子やゴミの様子を調べた。基本的にはどんなものもそれぞれで焼却するそう。しかし、村のあちこちに飴やお菓子の袋などが落ちており、きちんと処分がなされていないという印象だ。何か新しいものが入ってきたらそれなりの対処をしないと環境などに悪影響が出てしまうだろうと思われた。

ラオスという国に限らず、文化が変わっていくのは悪いことではないが、それと同時にやはり教育をしていけないといけないと感じた。(鈴木康弘)

⑭ JICAラオス事務所員との懇親会

クア・ラオという店で、ラオス事務所の方々3名とともに夕食を共にした。ラオスのよさや食文化、人間性などについての話で終始笑顔が絶えなかった。1週間ほどラオスに浸ってきたので、どれもこれも「わかる!

わかる！」という気持ちだった。特に、「ラオス人は日本人と似ているところがある」という田口さんの言葉がとても印象に残っている。例えば、田口さんは、ラオス人にある提案をした。しかし、はっきりとした答えが返ってこず、ラオス人は口ごもってしまった。その表情を見て「OK！無理しなくていいよ。」と答えたそうだ。お互いわかり合える部分があるようだ。

また、田口さんは、これまでにさまざまな国で活動してきたが、「どの国がいいとは言えない。どの国もいい。」とおっしゃっていた。なるほどなと思った。自分の国の文化や考え方が一番いいというスタンスで他の国を見てしまうと、この国は自分とは合わないという考え方が出てきてしまう。国際協力をする上では、そういうものの考え方ではなく、「どれもあり！」という気持ちを持ちたいと思った。(鈴木康弘)

● ラオスの移動途中

「はい、今日はあめちゃん！」

ラオスチームのバスの中は、いつも笑顔にあふれていた。しかし、もっとあふれていたのは食料である。みなさんが、あめちゃんやグミなどを回してくれるのだ。みなさんの心遣いに感謝。本当に温かいメンバーだったと思う。

あめちゃんを食べた男子はパワー全開。お手伝い男子として、重たいスーツケースも何のその。運転手さんやガイドさん、女子の力添えをした。そして、余ったパワーでお買い物男子に変身することもしばしばだった。

熱い思いをもった仲間同士、あめちゃんを食べ、笑い話をしていても、いつのまにか話題は教育、国際支援に……。いつでも、いつまでも熱いラオスチームだった。(鈴木康弘)

5. 印象に残る写真2点 とその解説

●写真1…ファイル名 [SKA_0476] (トリミング)

◇キャプション：「心のつながり」

◇解説文：

青年海外協力隊として、バレーボールの指導にあたる本間さん。生徒との心のつながりを感じた一瞬だった。



●写真2…ファイル名 [YBE_0320] トリミング

◇キャプション：「驚き」

◇解説文：

ウェイストピッカーの存在を初めて知った。私には知らないことがたくさんある。



6. 来年度参加する先生へのアドバイス (持ち物、必要な準備、学びの視点、注意事項など)

【持ち物、必要な準備】

- ・虫よけスプレーは、強力なものがいいと思います。
- ・整腸薬を持っていくと安心です。食べ物は日本と味は似ていますが、多少辛かったり、胃にもたれたりものもあります。わたしは3回ほど飲みました。
- ・服は手洗いで洗濯をして、4日分程度を回して着ました。
- ・ビーチサンダルやサンダルはとても役に立ちました。

【学びの視点】

- ・目的をもって研修をすることが大切だと思いました。マナビノオトをときどき見返すと良いと思いました。

【注意事項】

- ・仲間と積極的にコミュニケーションをとると、本当に楽しい研修になると思います。
- ・学び合うということを常に意識すると良いと思います。たくさん話して、仲間の学びを自分の学びにすると良いと思います。
- ・子どもたちへの個人の出し物(?)をする場合、なるべくシンプルなものがいいと思いました。時間や場所も限られていますし、何かとバタバタします。時間が余りすぎるくらいの方が、子どもたちも楽しめると思います。

7. その他全般を通じての感想・意見など

私は、今回の海外研修に参加させていただいて、本当によかったと思っています。自分の転機にもなりそうな気がします。理由は、大きく分けて3つあります。1つ目は、国際協力の現場に興味をもてたこと。2つ目は仲間と学び合う楽しさに気づけたこと、3つ目は、自分自身に少し自信をもてたことです。

国際協力について、今までほとんど知りませんでした。また、自分にできることはないかなどとは考えたことはありませんでした。しかし、今回の研修を通して、微力ながらもできることがあるのではないかと、そしてそれを生徒に伝えていきたいと思うようになりました。

仲間と学び合えた楽しさも、心に強く残っています。目的をもつこと、コミュニケーションをとること、振り返ること、共有し合うこと。どんなときも仲間とかかわり合いました。そうすることで、自分の考えが深まっていく実感がありました。仲間と学び合う研修を受けたことで、学び合いの大切さに気付きました。

最後に、自分自身に少し自信をもたせてもらいました。私は、周りにいる仲間に興味をもつことができました。仲間のことを知る楽しさにも気づきました。仲間とかかわる楽しさにも気付きました。仲間は自分を理解しようとしてくれました。そして、そうやって自分も少しずつ変われるということに気付きました。すると、「こんな自分でも少しはやっていけるかも。周りの人は理解してくれるかも。」と思うようになり、自信を少しもてました。

まだ、研修は続きます。ここまでで、もうすでに私のわがままでご迷惑をおかけしたこともありますが、海外研修にあきらめずに参加する道を選ばせてもらって、本当に嬉しく思います。ありがとうございました。

以上